
なんでも屋の日常～面倒事編～

らいち2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋の日常～面倒事編～

【Nコード】

N5391X

【作者名】

らいち2

【あらすじ】

非日常が日常ともいえるこの世界においてなんでも屋を経営する一家がいた。これはそんな一家の物語である。「ある男の日記」の続編ですが、前作を読んでもわかんないと思います。なので、前作を読んでもいない方も安心して読んでください。

最初っからこんな無理ゲーがあるなんて聞いたことがない

さて、どうしようかなこの状況。ハッキリ言ってめんどくさい。

どのくらいめんどくさいかと言えばこの世界を1000回壊し、100回元に戻すことをするくらいめんどくさい。

というのは流石に嘘だ。そんなこと俺ができるわけない。でも、めんどくさいことには変わりない。では、本当にどのくらいめんどくさいかと言えば紅花に真面目に生きていけと説くくらい面倒だ。

もつとわかりやすく言うならば、自分の人生を変えるつもりのないものに人生を変えろと言うくらい面倒なことだ。

つまり、言っても無駄なのにも関わらず、それでも言い続けることと同じくらいめんどくさい。

今の俺にとってそんなのと同じくらいめんどくさいということだ。

「なので、俺はめんどくさい。だから、頼むから今すぐどこかに行って自殺してくれ。葬式には出るつもりもないから。」

「ようやく口を開いたと思ったら、第一声がそれってひどくね!？」

はて?どこがひどいというのだろうか?俺としてはどこもひどくないと思うんだが?

「主に全部だよ!つか、いつの間にお前はそんなキャラになったんだ!？」

「心を読むな。それと、竜花が生まれたときからこんな風になった。

「別に好きで心を読んだつもりはねーよ。ていうか、その話マジ？」

「もちろん嘘に決まっている。それにもともと俺はこんなキャラだ。

「あれ?そうだったっけ?って、やっぱり嘘かよ!」

「待て。その言い方だとさっき俺が言ったことがすべて嘘だと聞こえるじゃないか。」

「それはすまん。って、聞いているのは俺ら二人だけだから別に

そんなこと気にすることもないと思うんだが？」

「俺が気にする。」

「……お前ってそんな性格だったわけ？」

「さーな。というかそんなこと今はどうでもいいだろう。」

「おっと、そうだったな。で、話はわかっていると「なるほど、わからん」思うが、ってちょっと待てい！何でわからねえんだよ！」

「わかるも何も説明すらされていないのにどうわかれというんだ？」

「さっき説明したばかりだろうが！それと、やっぱりお前性格と言うよりポジション変わってるぞ！主に、ツッコミからボケになっているぞ！」

「はいはい、わかったからとりあえず落ち着け。からかうのは今やめるからよ。」

「尚更悪いわ！」

「だから、落ち着けと言っているだろう。こんなやり取りしている
といつになったら本題に入っているのか作者もわからないだろ。」

「わかった、今メタ発言があつたが気にしないことにするさ。で、
もう一度本題を説明しておいたほうがいいか？」

「いや、いい。だいたいのはわかっている。要はあれだろ？俺
にお前の恋を手伝えというのだろう？そういうのは俺とかではなく
専門家に任せておけばいいと思うから今すぐここから出てって自殺
してこい。ああ、金も置いて行つてな。」

「お前ひどいを通り越して最低だなおい！つか、なんで自殺しな
ければいけないんだよ！する理由もわかんねえし！後、金は置いて
いかねえよ！」

「する理由ならあるだろう？お前が恋したその相手が俺の妹だつて
ことだ。ハッキリ言つて俺はお前のお義兄さんになるつもりもない。
だから、手伝いたくもない。というかなぜ手伝う必要がある？」

そう、何が面倒かというところ、黒鷹（くろたか）の恋を手伝う
ということだ。しかも、その相手が俺の妹ときた。本当に面倒き
まわらない。

そもそも、それならなぜ俺のところに来た？むしろ、その疑問が大きすぎるからこの仕事を引き受けるのがめんどくさい理由でもあるまあ、理由ならなんとなくわかるけどな。それでもめんどいことには変わらない。

というかこれは仕事と呼ぶのか？確かに、なんでも屋はやっているけどさ、こんな依頼は初めてだぞ？別にダメっていうことでもないが、だからと言っていいとも言えないがな。

「いや、俺でもわかつてはいるさ。そんなことなら別に誰かの手を借りるまでもないからな。それも、相手の兄のな。でも、そうはいかないことはお前がよく知っているだろう？お前の妹の竜姫（りゅうき）がお前のことを好きだってことをな。しかも、かなりのだ。だから、こうしてお前の力を借りることにしたんだ。」

そう言った黒鷹の目はしつかりしたものだ。それはいつもと変わらない目だった。それなら尚更おかしいと思った。

俺は黒鷹と一緒にいることもあったからよく知っている。あいつは自分のことに関しては他の者に自分から助けを求めることはなかった。その黒鷹がこうやって助けを求めている。これはあきらかにおかしい。

だから、俺は黒鷹の真意を聞きだすべくあえて、きつめの言葉を発した。

「なるほど。つまり、あれか？俺にお前のいいところを竜姫に教えると言うのか？そんなことをしても意味ない、というか間違いない聞く耳すら持たない。はつきり言おう、諦める。そして、2度と来るな。自分の力で自分の思いすら言うことすらできない奴と話したくもない。」

自分で言っておいてこれはひどいなと思ったが黒鷹の真意を聞きだすためにはしょうがないと思った。

そして、黒鷹から帰ってきた言葉はやっぱりというか、だいたい予想がついていたものだった。

「もちろん、俺もそう思った。だから、ここに来る前に俺の思いを竜姫にぶつけた。そしたら、なんて言っただろう？」

「なんとなく予想がつくがなんて言っただろう？」

「『私の中の男性はお兄ちゃんしかいません。だから、それ以外の男性は皆偽物です。もちろん、あなたもです。なので、今すぐにもこの世界から消えてください。』って言われたんだよ……」

そう言つて、黒鷹は言われた時のことを思い出したのか、いきなり落ち込み始めた。まあ、気持ちもわからないわけでもないがな。

自分の思いを告げたのに、その思いを拒否するどころか存在そのものを否定されてしまつては無理もない。

それにしても、改めて俺の妹の恐ろしさを知った気がする。例え、相手が俺の親友だとしても、容赦がないところがある意味すごい。まあ、相手が身内の親友という理由だけで承諾する奴なんてそんなにいないけどな。

さて、ここで俺の妹について少し説明しようと思う。蒼島 竜姫（そうじま りゅうき）、歳が5歳離れている俺の妹だ。外見を見れば1000人中1000人が美人と言えるほどの美貌を持つ。その特徴とも言える長い水色の髪がこの上なく似合う女性。あの、紅花すら接するときは緊張してしまうほどでもあり、燐花ですら惚れてしまいそうだと言わしめた。

しかし、今まで誰とも付き合つたことはない。なぜか？理由は簡単だ。なぜならあいつはブラコンだからだ。それも恋愛感情に近い極度の。しかも、対象は自分の弟ではなく兄の俺のほうである。――（だからといって、弟と仲が悪いわけではない）

そして、何より問題なのはその接し方だ。同じ女性とかなら寛容深いのだが、どういふことか異性、つまり、男性となるとさきほど黒

鷹が言っていたような冷たい態度をとるのだ。本人いわく、『お兄ちゃん以外の男性がこの世に存在するわけがない』だそうだ。

俺としては、お前の頭の中を一回見てみたい。何をどうやったらそんな思考になるんだ？それに、普通ブラコンなら男性ではなく女性に冷たく接すると思うのは俺の気のせいか？それとも、俺がおかしいだけなのか？俺の常識と言うものが周りと違うだけなのか？あれ？俺ってなんだっただけ？

など、竜姫のことについて説明していたら、いつの間にか自分自身の存在がわからなくなってしまう、なんてことが起きるのは珍しくはない。ただ、ひとつ言えることは俺は俺であって、竜姫は竜姫なのである。

つまり、人それぞれの個性があるというわけだ。と言っても、これは流石に個性の領域をはみ出ている気がするがな。もはや、異常だと言ってもおかしくはない。かくいう俺も異常だと思っている。だからと言って、嫌うつもりはないけどな。

さて、どうしようか。先ほども言った通り、竜姫の性格上黒鷹の思いが届くことはないに等しい。ならばどうするか？今の俺には選択肢が大きく分けて3つある。

1つ目は竜姫に黒鷹の良いところや竜姫に対して抱いている思いがどれほどのものなのか長時間にわたってひとつひとつ丁寧にわかりや

すぐ教え、黒鷹のことを認めるようにする。

結論から言うとはつきり言って無理だ。その理由はさっきの紹介していたなかにでている。例え、長時間、それも年単位の時間で言っただとしても、帰ってくる答えは決まって、『それでも認めるつもりはないよ』と言ってくるに違いない。なので、この選択は却下だ。というか、そんなことをするのはめんどくさい。

2つ目は竜姫の性格を変える。すなわち、今の性格をなくすということだ。だが、これも無理だ。というか、不可能だ。そんなことができたら当の昔にもう変えさせている。と言うのも、前に何回か竜姫の性格を変えようと奮闘していた時期があった。しかし、結果は現在の竜姫の様子を見れば言うまでもないだろう。それに、前にも言った通り、自分の生き方を変えないやつに生き方を変えろと言うのと同じぐらいめんどくさい。なので、これも却下。

3つ目は素直に諦める。うん、これだ、というかこれしかない。どうやっても、この選択肢しかない。それほど、竜姫の存在は難しいことだということだ。いや、難しいというより無理ゲーと言ったほうが正しい気がする。もし、ほかに選択肢があるとすれば是非教えてほしい。

さて、俺の中で答えが出たわけなので今だ落ち込んでいる黒鷹にさっそく言つとしよう。

俺は黒鷹の顔を見据えて、すがすがしいほどの笑顔でこう言った。

「黒鷹。はっきり言わせてもらうが、これは俺でも無理だ。というか誰も無理だ。だから、諦める。そして、話を聞いた分として金を置いて、今すぐ出てけ。」

「頼むからそういわないでくれ………って、ちょっと待て！いくらなんでもそれはねーよ！なんで諦めろと言われただけではなく金まで出さなくてはいけないんだよ！はっきり言って最低にもほどがあるだろうが！」

「そう言われてもな。こちらとしては貴重な時間無駄に潰されていくんだ。それ相応の対価を払うのは当然だろ？わかったらさっさと金払え。できれば日本円で言う10兆円ほど。」

「なんで10分費やされただけでそんな大金出さなきゃいけないだよ！対価にもほどがあるわ！それに無駄って言うな！それでも真剣に悩んだ結果ここに来たんだぞ！」

「だとしたら、がぜん興味があるな。真剣に悩んだ結果なんでここに来たのか是非聞いてみたいものだな。」

「だーから！さっきも言った通りお前の助けが欲しいんだよ！」

「そうだった？俺の中ではそんなことではなかった気がすると言ってたんだ。まあ、どちらにしても俺には無理な話だな。」

そう言っつて、席を立とうとした瞬間、突然部屋のドアが突き破られた。その間時間にしておよそ10兆分の1秒。あまりにも速い出来事だと思っつがこの世界ではそんなに珍しいことでもないの、俺と黒鷹はこれといったリアクションはしなかった。代わりに、黒鷹はもうすでに戦闘態勢に移行していた。まあ、俺には誰だがなんとなくわかるけどな。

そして、そのドアを突き破った者は黒鷹のほうを向いてこう言っつた。

「黒鷹のその悩み、この蒼島紅花が解決してあげる！」

そう高らかに宣言したのは俺の嫁の紅花だった。そして、これから起きる出来事が面倒なことになるのにはそう時間がかからないだろうと直感で感じることにそう時間がかからなかった。

結局こうなるんだなと思いつつも、自然にいやな気持になることはなかった。むしろ、それもいいかもしれないと思っつていた。自分もなかなか素直な人間じゃないな。そういう点だと紅花に感謝しなくてはな。

でも、できればドアを壊すのはやめて欲しい。そのドア直すのこれ
で500回目だぞ。

無理ゲーと人生において最悪の場面、お前ならどっち選ぶ？

前回のあらすじ

なんでも屋を経営する俺、蒼島竜輝の前に突如現れたのは親友の黒鷹だった。あまりにもいきなりのことでびっくりした俺は反射的に殴ってしまった。

その結果、黒鷹はアニメのような展開で星になって飛んで行ってしまった。そして、それ以降黒鷹の姿を見ることがなかった。

だが、俺は黒鷹を忘れない。なぜなら、自分の全財産を俺にくれた黒鷹の存在は俺にとって忘れるはずのないものだからだ。

だから、黒鷹の思いを無駄にしないように今日も金をふんだんに使うのだった。

「以上が前回までのあらすじである。はい、説明終了。」

「待てい！」

俺がこれまでの経緯のことを説明し終わるといきなり黒鷹が異議を

唱えてきた。どうやら、何か納得していないようだ。何が納得しなかったのだろうか？」

「全部だよ！最初っから最後まで全部の範囲でだよ！何勝手にありもしない話を作ってたんだよ！ねっ造するにもほどがあるだろうが！それと、心の声が口に出ているぞ！」

「出た！黒鷹の決まり文句、『』ほどがあるだろう！』！今回は最後のあたりで二連続出したあたりを見るとまだ衰えていないようだ！」

「何実況みたいな言い方してんの！？それと、衰えるどころか栄えた覚えもねーよ！いつ栄えたのか俺が聞きたいほっだよ！」

「確か、最高記録は一日で169回言ったことじゃなかったけ？」

紅花が黒鷹の疑問を答えるように言った。

「マジで！？え？嘘！？俺そんなに言ったことあったけ！？」

そう言っつて、黒鷹はうるたえ始めた。あの様子だとどうやら覚えていなかったようだな。

「この前、宴会の場で竜輝と黒鷹が漫才をやった時、竜輝がボケで黒鷹がツッコミだったから、黒鷹が何回もツッコんでいた時に同じ『〜ほどがあるだろう!』って言葉を使っていたじゃない。」

「しかも、本当だった!できれば冗談だっけていて欲しかった!」

「あ、じゃあこの話は駄目ね。冗談とは言えない話だし。」

「お願いだからそんなこと言わないでくれ!嫌でも、気になってしまっからさあ!」

「じゃあ、言っちゃおうかな?実はねさっきの話にはまだ続きがあつてね。2人が漫才し終えた後、竜k「はい、アウトー!」

俺は紅花が言い終える前に無理やり話を中断させた。黒鷹は俺のいきなりの行動にびっくりしていた。もちろん紅花でもある。

そして、気を取り直した紅花はさっそく俺に対して問いかけてきた。

「いきなり何をするの竜輝?突然のことだったからびっくりしたじゃない。まさか、頭が末期になってしまった?」

確かに、さっきの行動ははたから見ればおかしい行動かもしれない。それも、普段の俺の様子を知っているものならな。だが、ああでもない、と危ない気がした。主に、黒鷹関係で。

だから、俺はさっきの行動の理由を紅花に話すことにした。俺は黒鷹に聞こえないよう小さい声でこう言った。

「いや、その話を黒鷹にするのはまずい気がした。だから、あんな行動をした。それと、頭は末期にはなつてないし、なるつもりもない。」

「あの話ってそんなにまずかったけ？それと、いつかは末期になると思うよ？」

「まずいも何も、あんなこと黒鷹に聞かせるわけにはいかないだろう。後、俺は末期にはならない。と言うか、末期ってなんだ？」

「さあ？言ってみた私が言うのもなんだけどわからないわね。ただ、なんとなく言ってみただけ。そうね、確かに現状を考えるとあんな話を黒鷹に聞かせるわけにはいかないね。」

「だろ？だからここはひとまずだまってくれないか？」

「別にかまわないけど、その代りに。」

「はいはい、わかっているよ。これが終わったら一緒に寝てやるからさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん／＼／」

そっついながら、照れている紅花がかなりかわいかったのは言うまでもない。だって、こう見えて夫婦なんだぜ俺ら？嫁の言いたいことぐらいわかるっていうものなんだよ。

こういう権利はそうそう簡単に手に入れらるものではないな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい、さっきから何しているかと思っ
ていったら、いきなり紅花が赤くなっただがどうかしたのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、黒鷹？お前本当に竜姫に惚れさせるつもりはあるのか？正直今の発言で自分は無理ですって言っているぞ？」

「え！？まじでか！？・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、結局俺は無理なのかなあ・・・・・・・・・・。」

そう言って、黒鷹はまた落ち込み始めた。こういう黒鷹を見ていると正直言っとうっとうしく感じる。そんな事を考えていた時、ふと思いだしたことがあった。

「そういえば紅花はなんか考えがあったからここに来たんじゃなかったか？」

「ああ、そう言えばそうだったね。竜輝が話をそらしていたから忘れていたよ。」

「しょうがないかだろう。俺がしゃべっていると自然にそうになってしまうんだからさ。」

「別に責めているつもりはないよ。ただ、そういった特徴も私は好きだよ。」

「おいおい、えらくきつぱりと言っな。そう言われると、逆にすがすがしい気分になってしまっな。」

「だって、嘘じゃないし。全部本当のことだしね。」

「まったく、ほんとお前は正直な女だな紅花。で、結局どんな案なんだ？」

「案？ああ、黒鷹の悩みを解決することができるあれね。実は言うとな、もうすでにその案実行済みなんだ。」

「何？実行済みだと？いつたい、いつ実行したんだ？というか、どんな案なんだ？」

俺でも解決できないのに紅花は解決できると言ったところから興味は持ってはいたが、ここまで来るとますます気になってくる。

何より、もうすでに実行済みだというのが気になってやまない。なにしろ、紅花はさつきからただ話をしていただけで何かをしたというそぶりすら見えなかったのだ。にもかかわらず、実行済みというのだから不思議でならない。

そんな俺の疑問を察したのか、紅花は答えるように言った。

「実は言うと私がここに来る前にやっておいたんだ。」

「やっておいたってことはお前最初っから盗み聞きしていたのかよ。」

確かにだれかいるとは思っていたけどさ、害がないから放っておいたんだが、まさかそれが紅花だったとは。だって、気配が竜花の気配と同じだったからな。どうせ、燐花になんらかしらの力を借りていたんだろ。そんなことができるのはあいつぐらいだからな。

「別にいいでしょ。どうせ竜輝じゃ解決できそうもなかった気もしたし。」

「いつもの感ってやつか？まったく便利な感だなほんと。」

「そうでもないよ。少なくとも燐花義姉さんには劣っているよ。」

「あいつと比べるのはどうかと思うんだがな。まあ、今はそんなことはどうでもいいとしてだ。結局お前は一体なにをしたんだ？」

「んー？特にこれと言ったことはしていないよ。ただ、人を呼んだだけ。」

「へえ？ちなみに誰を呼んだんだ？」

「どうやってこの現状を解決することができる者はいないと思うん

だが。しかし、そんな俺の考えを吹き飛ばすように紅花は自信満々にこう答えた。

「竜輝のよく知っている人だよ。もう直着くと思うよ。それと、今回のことを100%解決することが出来るから安心していいよ。」

はたして、そんな紅花の期待に応えてか、家の鈴が鳴った。

ちなみに、どうでもいい話だが、この家には何らかしらの用事がある人が来ると鈴が鳴る仕組みがある。

その鈴がなったわけだから、誰か来たことは間違いはない。いったい誰なのか確かめに俺が行こうとしたが紅花に止められた。

「竜輝はここで待ってて。私が代わりに行くから。」

そう言うと、紅花は玄関のほうに出て行った。しかし、本当に気になる。いったい誰なんだ？それと、さっきからいやな予感がするんだが。

そんなことを考えていたら紅花が帰ってきた。

「すみません、こんなことで呼んでしまって。ささ、中に入ってください姫花義兄さん。」

その言葉を聞いた時俺の中の時間が止まった気がした。今、紅花は何て言った？

姫花と言っていなかったか？いや、まさかな。しかし、聞き間違いではないとしたら間違いなく姫花と言っていた。

だとしたら、ここから早く逃げなくては………！

そう思い、俺はとっさに反対側のドアを目指そうとしたのだが、その行動は実行する間もなかった。

なぜなら、先ほどの紅花とは比べ物にならないぐらいの速さで姫花が俺に抱きついてきたからだ。しかも、真正面からダイブして。

いきなりのことだったのでつい反射的で受け止めたが、それはそれ

でいろいろとまずい。

体が密着しているのは当然だが、なによりまずいのは顔と顔の間の距離だ。その距離感、およそ0・8cm。あと、少し前に出てしまえばキスしてしまうような距離だ。

後少し受け止めるのが早くなかったら確実にアウトだった………！

そう心の中で思った。

そんな俺の気持ちとは関係ないように目の前の竜姫とそっくりな顔を持つ男、姫花は口を開くところ言った。

「久し振り竜輝お兄ちゃん！いつ見てもかっこいいね！やっぱり僕が付き合える男の人は竜輝お兄ちゃんしかいないよ！」

うん、あいかわらずその性格なんだなお前は。俺としては、変わっ

てほしかったよ！

おもわず心の中でそう叫んだ。とりあえず、挨拶をしないと何が起きるかわからないので、早めに言っておこう。少しでも遅れると何をされるかわからないからな。

「あ……ああ、久しぶりだな。その、元気そうで何よりだ。とりあえず、少し離れてくれないか？」

「やだ あと10万日ぐらいこうしたい。」

「そこをなんとか頼む。お兄ちゃんとしては嫌というわけではないけどそう長くされるとこっちにも迷惑がかかってしまうからさ、頼む。」

「うーん、そこまで言うのだったら、しょうがないか。」

そう言って、姫花は離れた。そして、俺はすぐに紅花のほうを向いた。

「紅花、まさか呼んできたのって姫花のことか？」

「うん、そうだよ。姫花義兄さんなら今回のこと解決することができるからね。」

紅花はそう答えているが、俺としては嫌な予感しかない。なんせ、今回の行方が姫花にあるのだ。

これで何も起きないというのが無理という話だ。というか正直な話、一刻も早くここから逃げたい！という気持ちでいっぱいだ。

そう言えばさつきから黒鷹がおとなしいな。そう思って、黒鷹の様子を見てみたらまだ落ち込んでいた。言っただけで落ち込んでいるんだ、と普段の俺なら言うが今の状況では言えそうもない。

なんせ、姫花がここににいるからだ。もし、俺が少しでも気をそらせば何をしでかすのかわからない。そんな存在なのだ姫花は。

さて、さつきから疑問に思っている者もいるかもしれないので説明しておこう。

蒼島 姫花（そうじま ひめか）、竜姫の双子の弟で、その容姿と性格は竜姫と一緒に。ただ違う点は性別としゃべり方と体型しかない。つまり、それ以外では同じなのだ。そして、竜姫が俺以外で唯一普通に接することができる男性である。もっとも、その接し方は女性を相手にしているのと同じだがな。

さて、ここで気づいた者もいるだろう。そう、姫花も姉と同じブラコンであり、同じ思考の持ち主なのだ。もうここまで言えばいやでもわかるだろう。俺としてもあまり言いたくもないものである。

だから、結論から言わせてもらえば、もうすでにこの場がいつカオスになってもおかしくないのである。いや、もうすでになっているのかもしれない。今、俺の中ではこの現状が一刻も早くなくなっほしいと思っている。

そして、これだけは言わせてもらいたい。

どうしてこうなった？

無理ゲーと人生において最悪の場面、お前ならどっち選ぶ？（後書き）

最後の言葉は作者自身の言葉でもあります。本当にどうしてこうなった？

面倒事の終わりは大抵ろくなことにならない

前回までのあらすじ

なんでも屋を経営する俺、蒼島竜輝の前に突如現れたのは親友の黒鷹だった。

話を聞いているうちに黒鷹が俺の妹の竜姫に惚れたということが判明した。

だが、竜姫は極度のブラコンの持ち主だった。それでも、一回自分の思いを告白した黒鷹だが、竜姫が受け入れるはずもなく、存在そのものを否定されたうえで断れてしまった。

しかし、そんなことで諦められなかった黒鷹はあろうことか俺に助けを求めてきた。俺としては面倒なことだったので、断ろうとしたが、途中から参加してきた紅花の「私に考えがある」みたいなことを言ったので、仕方なく協力することになってしまった。

そして、紅花の案を採用した結果、俺の弟でもあり、竜姫と同じ性格を持つ姫花が家に来た。↑今ここ

「できれば、夢であってほしかった……。。。。。」

もちろん、良い意味で。だが、残念かな。現実是非道なんだよな、これが。

そんな俺の気持ちを察したのか、紅花が励ましの言葉をかけてきた。

「大丈夫だよ竜輝。これが終われば元の生活に戻るんだからさ。」

「その言い方だと、まるで今までろくなことがなかったように聞こえるんだが。それと、こうなった元凶は紅花にあると思うんだが？」

「きつと気のせいだよ。それに、どっちにしろこうなったと私は思うよ？」

「どっちにしろこうなったと言うわけか。で？結局紅花に何をするつもりなんだ？」

「特にこれといったことはしないよ。ちょっとした芝居を紅花義兄さんに打ってほしいだけだから。」

「芝居？……まさかとは思うが紅花に竜姫の代わりにやるんじゃないだろうな？」

「流石にそんなことはしないよ。ただ、真実を教えるだけだから。」

え？

今、なんて言った？ 真実を教える？ 何の？ というか、それがどう解決に繋がるの？ 俺にはまったくわからないんだけど。

「あれ？当事者でもある竜輝は知っているはずんだけど、その様子だともしかして何のことかわからない。」

「うん、さっぱりわからん。何のことなのかもわからん。なので、俺は説明を求む。」

「うん。別に説明してもいいんだけど、できれば早く終わらせたいと竜輝も思っているでしょ？だから、説明とかしていると時間が無駄にかかってしまうんだよね。そこんとこ理解してくれる？」

「正直納得がいかないが、この際我慢するか。それじゃあ、さっそくやってくれないか？俺も本当に早く終わってほしいし。」

「わかったよ。それじゃあ、姫花義兄さん言われたこと頼んだよ。」

「うん！紅花ちゃんのお願いだからそう断るわけにもいかないしね。ここは僕に任せて。竜輝お兄ちゃん達は大船に乗ったつもりでいてね。」

「大船と言うより泥船、いやボロ船のほうがあっている気がするんだが。」

何しろ、あの姫花がやるんだ。不安になるのはしょうがない。けれど、姫花はそんなことはないかのように、自信気に言った。

「大丈夫だよ。だって、こうなつた原因を教えるだけでいいんだからさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・原因？つて、まさか！」

ようやくここにきて何をしようとしているのか理解することができた。そして、早く止めなくては！と思った。

そう考えて、俺は行動を移そうとしたが、

「だめだよ竜輝。ここで邪魔をしたら、それはそれでいろいろとまずいんだからさ。」

そう言いながら紅花が俺の前に立ちふさがった。

「いやいやいや！今も十分にまずい状況にあるから俺！だから、頼むからそこをどいてくれ！」

「何言っているのよ竜輝。どいてと言って、はいそうですか、と言う人がいる？第一、そもそもの原因が竜輝にあるんだから責任を負うのは当たり前でしょ？」

「そうだけでもよ！でも、そうなると黒鷹が俺に襲ってくるだろう。俺としてはそういうのは面倒だから嫌なんだよ！」

「別にいいんじゃない。いい機会だし、久しぶりに運動するのもいいと私は思うよ。それと、その言い方だいろいろまずい気がするよ。主に、BL方面で。」

「お前は何言ってるの！そもそも、俺にそんな気なんてな「りゅううううううううきいいいいいいいい！」」

そんな声とともに黒鷹が俺に襲い掛かってきた。と、同時に俺は回避行動に移した。そのため、初撃はよけることができた。ただ、その先にあつた壁が木端微塵になつてしまった。

この間、1秒にもたたない。本当にこの世界に住んでいるものは吹っ飛んでいるなと改めて感心する俺だった。もっとも、俺もその一人だから言えた義理もないが。

さて、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。黒鷹の様子を見

ると、今にでも俺を殺そうとしているような感じだ。いや、間違はなく殺す気でのるのだろ。はつきり言って、かなりまずい状況だ。

そんな俺の考えを知ったことないように、黒鷹は続けて攻撃を仕掛けてきた。どうやら、間違いなく本気のようなのだ。

・・・・・・はあ、やるしかないのか。

半ば諦めとも言えることを思いながら、俺は黒鷹を迎え撃つべく、迎撃態勢をとった。狙うはカウンターだ。

まずは繰り出された右手の正拳突きを避ける。その瞬間衝撃波が発生したが、俺には何の問題のないことだ。そして、その隙を突こうとしたが、流石黒鷹と言ったところだろう。すぐに次の行動に移行していた。

と、同時に黒い水っぽいものが俺に当たった。それはすぐに消え去ったが、その後急に体が動かなくなった。

黒鷹の能力か

ここで少し説明しておこう。この世界に住む者は皆なんらかしらの能力、つまりは特徴と呼べる力を持っている。それらは遺伝的に受

け継がれたり、あるいは突然生まれるなど、なんらかしらの方法で手に入れている。

当然黒鷹や俺も持っている。そして、さっきの現象はその黒鷹の能力の一部によるものだ。目で見ることができることから、効果が薄いものだろう。だが、それでも十分な力がある。結果、現在動くことができないんだから。

——まあ、こんな程度でやられるほど俺はやわではないけどな

そして、俺が動かなくなつたところを黒鷹は容赦なく突いてきた。それも、確実性のある技、『確死』で。

『^{かくし}確死』

その意味は言葉通りの意味である。多くの者が相手を確実に仕留めるのに最も使う技である。その攻撃方法は個人によつては様々だが、目的や根本的な動作は同じである。まず、相手の中心、それもすべての核となる場所を突く。そして、成功した後、再生妨害、精神侵害などを行い、相手の身体、精神機能を停止させる。これが確死の主な攻撃順序である。

ただ、この技を成功させるにはいくつか必要になるものがある。ま

ず、相手の中心を把握することができることだ。それも、もつとも重要になるところをだ。それができなきゃこの技は使うことができない。次に、再生妨害などを行えるようにすることだ。これがもつとも重要だ。たとえ、核を突くことができて、平気なやつなんてこの世界にはごまんというからな。もつとも、それで、相手が死んでも、一回死んだことになるだけで、生き返ってしまったら、肉体だけがなくなっただけ奴もいるけどな。

まあ、そんなことはこの際どうでもいい。とにかく今は動くことが先決だな。

黒鷹はこちらに近づいてくる。そして、確死を繰り出した。その瞬間わずかな隙ができた。

———
今だ！

俺はその隙を突いた。それもとびつきりのやつで突いてやった。結果、黒鷹は盛大に吹っ飛んで行った。

.....あれ？黒鷹ってこんなに弱かったか？

今の攻撃であんなに吹っ飛ぶとは思っていなかったが、まあなんだっていいか。

そう考えた俺はとりあえず休むことにした。と、ふとさっきから気になっていたことを思い出した。

「そう言えば紅花。 紅花はどこに行ったんだ？」

そう、紅花がいないのだ。 本来なら、紅花の性格上あの場に乱入してもおかしくなかった。にもかかわらず、乱入するどころかこの場にいないのだ。

そう疑問に思っていた俺は紅花に問いかけた。そして帰ってきた答えはある意味納得のできるものだった。

「紅花義兄さんはね竜姫義姉さんに報告しに行ったよ。賭けに勝ったことができたからね。」

ああ、なるほど。それなら納得だな。

さて、ここで今回のことが起きてしまった原因について説明しよう。

すべてはこの前行われた宴会から始まった。俺と黒鷹がその場で漫才をしたことは覚えているだろうか？その漫才が終えた後に問題は

起きた。漫才終了後に俺がついこんなことを言ってしまったのだ。

以下、回想。

「そう言えば、黒鷹が誰かに惚れたってことは見たことないな。」

「ん？そう言えばそうだな。なあ、黒鷹。お前誰か好きなやつはいないのか？」

「特にいないが、それがどうした。別に誰かに惚れるつもりは俺はないぞ。」

「それ、言いようによつては自分は一生独身でいるつもりって言っているようなもんじゃね？」

「えー？なんかそれだと寂しくない？」

「いや、別に寂しくもないんだが。」

「でもなあ。あ、そうだ！いいこと考えた！」

「何だ竜輝？　いったい何を考え付いたんだ？」

「いつそのことこ黒鷹を誰かに無理やり惚れされりゃよくね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「だから、黒鷹に惚れ薬か何かを使つて、誰かに惚れさせればよくねえかって言つてんだよ。そして、誰に惚れるか賭けるのさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それ、乗った！」「」「」「」「」「」

「待て待て待て待て！　何乗つてんだお前ら！？　つか、さりげなく賭けごとするんじゃないかねえ！　しかも、一番損を被るの俺じゃねえか！」

「あ、そう言えば今都合がいいことに惚れ薬持っているんだっけ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・紅花ナイス！」「」「」「」「」「」

「ナイスじゃねええええええええええ！　何一つよくもねえよ！　むしろ、俺の何かが危ねえよ！」

「とりあえず、黒鷹はしばらく寝てろ。」

「ふ！？」

「うわゝ、随分と容赦ないなお前。」

「別にこんなことで死ぬわけでもないだろう。」

「同感だ。」

「それでいいのか！？」

「いいんじゃない？」

「ま、なんだっていいさ。で、その惚れ薬は遅速性のものか？」

「そうだよ。効果が表れるのはだいたい5日ぐらいかな。ちなみに、効果が表れてから初めて見た女性に惚れるものだから。だから、誰かに惚れた後はそれ以外の者に惚れないから。」

「遅速性にしてはやけに遅いな。いったいどこで手に入れたんだそ

れ？」

「そこは秘密。」

「そういうことは今はどうでもいいだろう。で、お前らは誰に賭けるんだ？俺は燐花に賭けるとしよう。」

「んじゃ俺は紅花で。」

「俺も紅花にしよう。」

「それじゃ、僕は竜姫姉さんにしようかな。」

「姫花、お前はいつたどこから現れたんだ？正直少し驚いたぞ。ちなみに俺もりゅうきに賭ける。」

「「「「「「「え？なんでそこで竜輝が出てくるんだ？はっ！まさかお前そっちの気だったの！」「」「」「」「」」」」」」」

「違うわボケ！俺は女のほうの竜姫って言ったんだ！」

「なんだよ。たく、変な勘違いさせんなよ。」

「お前らが勝手に思ったただけだろう!」

「というか今さらだけど、竜輝と竜姫って字は違うけど、発音は同じだよな? 苗字も一緒だし。」

「そうだな。それでよくどっちのりゅうきなのかわからなくなるかな。」

「悪かったな同じ名前で。」

「いや、別に攻めた覚えはあるけどさ。」

「あるのかよ! てか、そこはないというべきだろ普通!」

「まあまあ、落ち着いて。あ、そう言えばひとつ言い忘れたけどこの惚れ薬服用すると五日間の記憶がなくなるからそこんところよろしくね。」

「わかった。じゃあそのことを踏まえた上で改めて賭けをするか。ただし、一回言ってしまった者は変更することできないから。」

「しまったあ！そんなことなら早めに言わなきゃよかった！」

「後悔してももう遅いぞ。じゃ、俺は赤夜にかけるとしよう。」

「それ当たる確率低い気がするぞ？」

「まあ、なんだっていいだろう。じゃ、俺は……………」

と、こんなやり取りをしていた。そして、全員が言い終わった後、当然の如く黒鷹に惚れ薬を無理やり飲ませた。まあ、黒鷹がまだ延びていたから飲みやすかったけどな。

「そう言えば、その惚れ薬の効果はいつ切れるんだ？」

「自然には切れることはないよ。元に戻すには、効果が表れた後に何らかしらの方法でなくなった記憶を戻すことができればいいだけだから。」

「……………あれ？だとしたら、一番被害を被るのって俺じゃね？黒鷹の性格を考えると真っ先に襲い掛かってくるのが目に

見えるんだけど?。」

「そうなるね。まあ、そこは自業自得と言っわけで納得してね。」

「そう言われると、納得せざる終えないが、俺としてはあまりいいもんでもないな。というか、いやだ。」

「しょせん自業自得は自業自得だろ。そもそも、最初に言い出したのはお前だぞ。」

「うぐ。そう言っわけると返す言葉もない。」

「あ、そろそろ時間だから、私帰るね。」

「おっと、もうこんな時間か。じゃあ俺らも帰るとするか。」

そんな具合で皆帰って行った。そして、俺はなんとかして黒鷹の記憶を戻さないよう帰路に就く途中で決心していた。

以上、回想終了

ここまで見ればいやでもわかるだろう。そう、すべての発端は俺だったのだ。いや、俺だって、少しかい気味でやったつもりだったんだが、何をどうやったらこうなったのだろうか。

ただ、ひとつ言えることはやはり口は災いの門だってことだ。

しかし、あれだな。俺としたことがうつかりしていたな。思えば黒鷹がここに来た時に気づけばよかった。そもそも、あいつが誰かの惚れるということ自体ないに等しいしな。

もしかしたら本当に誰かに惚れたのか、と思っていたが、それが惚れ薬によるものだってことを忘れていたところを見ると、俺も間抜けだな。

まあ、そんな過ぎてしまったことはどうでもいい。問題は、この後だ。

黒鷹のことだ。今日一日で諦めるつもりはないだろう。だとしたら、面倒だな。別に穩健派ってわけでもないが、相手から挑まれるというのはあまり気が乗らないのも事実だ。

それに、これどうしようか。さっきの戦いのせいで、部屋のあちこち、というよりほぼ全体が吹き飛ばされている。結局また直す羽目になるのか。

なら、言わなきゃよかったな。

— はあ。

こんなことになるぐらい

面倒事の終わりは大抵ろくなことになる(後書き)

なんかグタグタな気がするのは気のせいだろうか。

あられもない疑いをかけられるのはあまりいい気持ちがないものだ

もう、泣いてもいいか？

いきなり言っただが、俺もここまでくるとなんといいのかわからない。

ただ、1ついえることは、何でこうなってんの？

確かに、前回の出来ことは100%俺に原因があるのは認めよう。その結果、黒鷹が怒るのかもしれない。

しかし、こればかりは流石に認められない。というか認めたくもない。もし、こんなのを認めたらかなりまずい。主に、俺の性格として。

「なあ黒鷹、1つ聞いていいか？」

「・・・・・・・・何だ？」

「何でこうなってんだ？」

「それは俺の台詞だ。俺だって、こんなことになるなんて聞いてもないし、たとえ聞いたとしても、許可するわけないだろう。むしろ、速攻で焼却処分するわ。」

「だよな。しかし、本当に何をどうやったらこんな本ができたんだが。しかも、最悪なことに少し流行り気味だし。」

そう言つて、俺は目の前においてある本を見る。本には『あいつがこんなに受けなわけがない』というタイトルが書いてある。なんかどつかで似たようなタイトルを聞いた気もするが、この際スルーしておく。

問題はその中身だ。実際中身を開くと2〜3ページぐらいでアレな展開が開かれている。アレとは何かと言われても、しょうじき答えたくもないが、仕方がないのでほんの一部を紹介しよう。

注意！ ここから先は本当にアレな展開があります。それでもいい方はどうぞ。

・ ・ ・ ・ ・ 見ないでくれると俺としては嬉しいな。
か？なら、存分に見るがいい！
・ ・ ・ ・ ・ 本当にいいのか？後悔しないの

以下、本の内容の一部シーン。

『まったく、お前も懲りないやつだな。こんなにイかせているのにまだ満足していないとはな。』

『その台詞はもう聞き飽きた。それに、こんなことでイかれてしま
うほど俺は軟じゃないさ。』

『そうか。なら、もっとやるがいい。もっとも、軟なお前ではすぐ
にへばってしまうがな。』

『いったいいつ俺が軟つったんだよ！というかさっき軟じゃないっ
て言っただろうが！』

『そうだったけ？』

『そうだよ！たく、そういうところは本当にお前らしいよ。』

『そうかい、そう思われていたならうれしいな。……..
なあ、そろそろいいだろ？早くしないと、俺も冷めてきてしまうか
らよ。』

『つと、すまない。それじゃ、いくぞ。』

『って、お前いきなりそれは激し、』やばい！もういつてしまいそ
うだ！』おい！いくらなんでも早いだろうが！』

『うおおお！出る！出るぞおおお！』

『イ、イク』はい、アウト―――！』

思わず叫んでしまった。でも、俺は悪くない。悪いのはこの本の内容だからな。え？先を見せろだって？冗談言うな。誰が好き好んで自分がモデルのBL本を見せる必要があるんだよ。ホモでもないかぎりそんなの嫌に決まっているだろう。

さて、理解いただけだろうか。そう、どういわけか俺と黒鷹を題材にしたBL本が出ているのだ。しかも、いつの間にか公認済みになっているし。

正直言つて怖い。なにしろ、自分の知らない間に本として出てきたのだ。しかも、認めた覚えもないのにだ。そっちの気がない限り怖がるのは当たり前だ。

「しかし、やけに最近周りの視線がおかしいと思っていたが、この本のせいだったのか。確かにこれなら納得できるな。」

黒鷹はそのBL本を指しながら、そう言った。

「まあ、確かにこれなら納得できるな。事情を知るために適当に一人捕まえて聞いていたら、この本を渡されたが、その理由も今わかった気がするな。まあ、今では俺らにとっては無用の産物だと思うがな。」

「それには同感だな。で、どうすんだ？」

「別にどうもしないさ。こんなことは別に珍しいことでもないだろう？ 大方、あいつがなんとなく書いただけだと思うから、すぐになるだろう。それに、こんなことぐらいほっとけばすぐに沈静化する。」

「だと、いいんだけどな。そう言えばさっきから気になっていたんだが紅花はどうしたんだ？」

「紅花なら確か買い物に行行って今朝出て行ったがそれがどうしたんだ？」

「いや、紅花のことだからこんなことを知ったら動揺するかなと、ふと思ったからな。」

「流石に紅花でもこのぐらいで動揺するとは思え」「りゅ、竜輝――」

「！」

突然そんな声が聞こえたかと思うと、ドアをぶち破って紅花が目の前まで接近してきた。ちなみに、黒鷹は巻き込まれないよう俺の横に移動していた。

「こ、これはいったいどういうことなの！？ねえ！これ嘘だよね！？嘘だと言つてよ！」

そう声を荒げて紅花は手に持っていた本を、バン、と目の前の机の上に置いた。こんな紅花はそうそう見られるものではないな。そう俺は思った。だがな、紅花。いい加減そのドアを壊すのはやめろ。なんか恨みでもあるのか？そのドアに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おゝい、動揺しないんじゃないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺でもすべての予感が当たるわけでもない。だが、流石にこれは予想できなかったけどな。」

「竜輝、これってフィクションだよね！？そうだよね！？そうだと言つてよ！」

「そうだ。というか、そんなのがノンフィクションだったら困るわ。」

「……いや、やっぱいい。別に今じゃなくてもいいかな。というか、ここでやると黒鷹から嫉妬が飛んできそうだな。」

「いや、別に俺はそんなに気にはしないが。別にどうとも思わないしな。それに、俺はこっちのほうが気になっているからな。」

そう言って、黒鷹はさっき紅花が持ってきた本を手を持った。

「どうせ、これと同じやつだと思っけどな。そうだろ、紅花。」

そう言って、俺は紅花に『あいつがこんなに受けなわけがない』を渡した。

「え？いや、これとは違うよ。というかこれ何？何で黒鷹と竜輝と一緒にこんな風になっているわけ？そんなことあり得るわけがないに。」

「は？ちょっと待て。だとしたら、さっきの本に何が書かれているんだ？」

「……………読んでみるか竜輝。だが、俺としてはあ

「まり見ないことをお勧めするがな。」

そう言つて、黒鷹は途中まで読んだのであろう、その本を俺に渡し
てきた。

「そんなこと言つとますます気になるけどな。まあいいか。さて、
何が書かれて……！！！」

本の表紙のタイトルを見た瞬間言葉が出なくなった。いや、出な
くなったというより、俺の中の時間が止まったと言えがいいのだらう。
それほど衝撃的なタイトルだったからだ。

なんせ、表紙には、『竜×竜！性転換した竜姫と竜輝の愛の物語』
と書いてあるのだ。しかも、絵が無駄うまい。何気にそれが腹立つ
つて、突っ込むところはそこじゃない。俺は事の真相を確かめるべく、
黒鷹に訊ねた。

「……………なあ、黒鷹。俺の目の錯覚なのか、
なんか表紙に認めたくもないものが書かれているように見えるんだ
が。」

「すまいるが、それはまちがいないようがない事実だ。しかも、そ
れだけではない。これも見てくれ。」

そう言つて、黒鷹はもう一冊の本を俺に渡した。どうやら、二冊あったようだ。

「今度はいつたい何・・・・・・・・・・・・・・・・う、うあうあk t j j だらうえw じゃかj!」

「お、おい！大丈夫か竜輝！なんか変な言葉を発しているぞ！」

「うふあk じえなれw j はj k あh h g ーじゃl k d j!」

「ちょ、これ本格的にまずい！紅花、すまないが手を貸してくれ！俺一人では無理だ！」

「う、うん！わかった！」

そして、紅花の協力もあつて竜輝を抑えることには成功したのだ。だが、あまりにもショックが大きすぎたせいなのか、翌日まで意識が戻らなかった。

机の上に残された本の表紙にはこう書いてあった。

『姫花と竜輝の愛の逃避行物語』

だ、駄目だよ竜輝お兄ちゃん そんなにやるともう僕イっちゃうって／＼／＼／＼／

そして、下の欄にこう書かれていた

注 この作品はノンフィクションです。なので、温かい目で見てやってください。

あられもない疑いをかけられるのはあまりいい気持ちがないものだ（後書き）

なんかいろいろまずい気がする

なんとなくでやられるといい気分がしないものだ

前回までのあらすじ

なんでも屋を経営する蒼島竜輝に過去最大の危機が到来した！なんと、いつの間にか自分がモデルになっているBL本が流行していたのだ！

しかも、そのカップリングの相手が様々だった！さらに、最悪なことに姫花や竜姫とのカップリングもできていたのだ。

あまりの内容に精神崩壊（？）をきたしてしまった竜輝の運命はいかに！

「勝手に死亡フラグみたいのもの立てるんじゃないー！」

「うお！いきなり起き上がんなよ！こっちがびっくりするんじゃないか。」

あれ？何で俺寝ているんだ？確か、紅花が持ってきたBL本を見て、それで……………。

「……………うん、思い出した。できれば思い出したくもない記憶だけだな。」

「おーい、聞いているのか？さっきからボーとしているけど大丈夫なのか？」

「ん、ああ、大丈夫だ。それで、俺はどのくらい寝ていたんだ？」

「だいたい一日ぐらいだな。しかし、こっちは驚いたぞ。いきなり変な声を出して暴れていたんだからな。」

「それはすまないと思っている。だが、正直言ってあの手の本は俺にとっては苦手なだけだな。それも、カップリングの相手が姫花なら尚更な。」

「それは俺も同じだ。というか、あれが好きなやつなんてそんなにいるものでもないけどな。」

「むしろ、いたら困るわ。主に、俺の常識的に……………よし、決めたぞ。」

「何をだ？」

「このまま放っておいたら俺たちのなにかが危ない。なら、広がる前にこの件を俺達の手で終わらせる。」

「終わらせるって言うてるけどよ、そう簡単にできるものでもないぞ。というか、なにかってなんだ？」

「なにかはなにかだ。とにかくまずいものだと思えばいい。それに、そう難しいことでもない。」

「そうなのか？」

「ああ、今回の場合元を抑えてしまえばすぐに解決できるようなものだからな。幸いにもまだそんなに広がっていないからそんなに時間もかからないだろう。」

「そううまくいくのか？俺には何だか失敗しそうな気がするんだが。」

「大丈夫だ。俺を信じろ。」

「なんかますます失敗しそうな気がするんだが。まあ、気にしてもしょうがないか。それに、俺もこのままだとあらぬ疑いをかけられ

そうだしな。」

「よし、そうと決まれば早速行くぞ。」

「行くつて、もうか？結構早く行くんだな。」

「まあな。それに、ほら。日本語でよく言っじゃないか、思い立ったが吉日つて。」

「まあ、そうだけだよ。でも、いくらなんでもこの時間帯にいろとは限らないと思うぞ？もし、いなかったらどうするんだ？」

「そこんとは大丈夫だ。事前にあいつがどこにいるかは調べてあるからな。」

「調べたつて、いつ調べたんだ？言っちゃ何だかそんな時間なかったと思うんだが。」

「いや、ここにちゃんと書いてあるぞ。」

そう言つて、俺は一冊のBL本を持って、一番後ろのページを黒鷹に見せた。

そこには、『もし、なにか言いたいことがあれば作者本人に知らせてください。直接話したい方はここに来てください。いつでも歓迎いたします。』と書いてあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・普通こんなこと書くやついるのか？」

「いないに決まっているだろう。というか、こんなこと書くやつは俺が知っている範囲では1人ぐらいしか知らん。」

「そういう意味ではあいつは馬鹿なのかもしれないな。」

「別にそう言えるわけでもないけどな。まあ、なんだっていいけどな。さて、場所がわかってのことだし、さっさと行くか。」

「そうだな。」

「と言うわけで紅花。俺らちょっと出かけてくるから留守番よろしく。」

「うん、わかった。できるだけ早く帰ってきてね。」

「わかった。まあ、そんなにかかるわけでもないと思うから安心しろ。じゃあ、行ってくる。」

そう言っで、俺らは家を出た。ただ、隣の黒鷹が「このリア充め」と言っていたが何のことだろうか。まあ、なんだっていいか。

向かう途中、道中でいろんな目で見られたが、別に気にしなかったというか、気にしていたらきりが無いと思ったから無視していただけだな。

まあそんなこんなで今俺らは目的の場所についたわけだ。割愛？なんのことかな。

さて、今日の前には普通の二階建ての一軒家が建っている。一見、なんてことのない場所だと思っだろう。しかし、ここが俺らの目的の場所なのは間違いない。

「しかし、こうして見ると、本当にただの一軒家にしか見えないな。」

「そうだな。それに、中もほとんどが普通だからな。ただ、一部を除いてだが。」

「そうだな。んじゃ、さっさと終わらせるとするか。」

そう言つて黒鷹は家の玄関に手を伸ばした。と、とっさに俺はそれを言葉で制止した。

「待て、なにも玄関から入る必要もないだろう。というか、めんどうだから外からやる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？つて、お前、まさか！」

なんか黒鷹がうるたえ始めたが今の俺にはどうでもいいことだ。さて、やるとするか。

そう思い、俺は目の前の標的の狙いを定めた。

そして、次の瞬間、そこにあつたはずの家が丸ごと消えていたのだつた。

「よし、終わった。さあ、帰ろう。」

「終わったじゃねええええええええええええ！何やってんのお

前！いくらなんでもやりすぎにもほどがあるだろうが！」

「やりすぎ？どこがやりすぎなのか説明してほしいな。できれば、3文字で。」

「3文字で言えるわけねえだろうが！むしろ言えたらスゲーよ！って、そんなことはどうでもいい。で、何がやりすぎかって？主に、お前の行動そのものだよ！何家ごと消滅させてんのお前！？」

「だってさあ、いちいち家の中に入るのもめんどいし、相手の言い分を聞くのもめんどいじゃん。なら、もういつそのこと事前に消せばいいじゃんと思った。その結果、こうなったわけだ。」

「こうなった、じゃねーよ！いくらめんどいからって何でもかんでも許されるわけじゃねーよ！もし、許されたら俺は嫌だね！主に、俺の中の常識的に。」

「お前の都合なんて聞いてないんだがな。というわけで俺は帰るわ。」

「ちょっ！？本当に帰りだしたよこいつ！なんの弁明もしないでさげなく帰ろっしているし！？」

なんか黒鷹がわめいているが正直どうでもいい。今は相手にするの
も面倒だ。

そんなことを思いながら俺は帰路についたのだった。ん？どうやって、家を消滅させたかった？説明するのはめんどいからそっちでいろいろと想像してくれ。というか、なんで見ず知らずのやつに自分の手の内を教えなくてはいけないんだろうな。

そんなことを家に帰る途中にふと疑問に思った。

そう言えば、3日後に消滅を免れて帰ってきた奴がいたと聞いたな。
しかし、消滅させようとするとはひどいやつもいるもんだな。

なんとなくでやられるといい気分がしないものだ（後書き）

なんかグタグタな気がする。冗談抜きで。

面倒なことが終わるときは物語の終わりでもある

「さて、いきなりだがひとつ言っておかなければならない。」

「お前がそんなことを言うなんて珍しいな。何かあったのか？」

「あつたと言えばあつたな。で、何があつたかと言うとだな、この小説をそろそろ終わりにしようかと思う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「以上だ。今まで見ていただきありがとうg」ちよつと待て！」

「いくらなんでもいきなりすぎるだろうが！いったい何があつたんだ！少しぐらい説明させる！」

「まあ、ぶつちやけ言つとネタが尽きてしまったんだ。」

「早すぎるわ！というかなんでそんなに尽きるのが早いんだよ！もう少しぐらい考えろよ作者！」

「黒鷹の気持ちは俺でもよくわかる。実際俺もそんな気持ちだから。しかしな黒鷹。こうなってしまったのにはある原因があるんだ。」

「ある原因？そんなのがあったのか？」

「実は言つと原因はこの小説のタイトルにあるんだと。」

「タイトル？」

「黒鷹は知っているかもしれないが、この小説を書く前に今はもうないが試作のものを書いて投稿したのは覚えているだろ。」

「ああ、知っているさ。確か、タイトルと実際の内容が違いすぎたので一回消してしまったんだよな。それがどうしたんだ？」

「その通りだ。それで、一回消していちから書き直してできたのがこの小説だ。」

「そうだな。それで、今の俺らが出来たようなもんだしな。」

「そうだ。結果、この小説ができたんだ。だが、ひとつ問題が生じた。そして、それが今回の元凶とも言える。」

「問題？まさか、あの少しぐだぐだっぽくなってしまった内容のことを言っているのか？別に、そんなことを気にしてもしょうがないと思うんだが。」

「いや、そこじゃない。確かに、ぐだぐだな展開になってしまったこともあったが、それでもやめようとは思わなかった。しかし、この小説のタイトルを改めて見たとき、やめることになってしまった。」

「タイトルになんか問題でもあったのか？」

「………黒鷹、この小説のタイトルはなんだったか覚えてるか。」

「えーと、確か、なんでも屋の日常、面倒事編、じゃなかったか？」

「そうだ。そして、タイトルを見ればわかるだろうが、面倒事編と書いてある。これが原因でやめることになってしまった。なぜか？はつきり言ってしまうと、内容を書くのが難しくなってしまうのだ。そもそも、面倒事編と書いてしまったのが悪かった。いくらタイトルが思い浮かばず、一回消したタイトルを使い、混合しないよ

う言葉を少し追加したからと言って、こういうタイトルにしてしまったのは完全に失敗だった。結果、書くのが難しくなってしまったからな。」

「まさかこの小説のタイトルにそんなことがあったなんてな。ということは、あれか？この小説のタイトルはいわば応急処置みたいに付けられたのか？」

「まあそんなところだ。そして、今につながるわけだ。というか、面倒事編ってなんだ？そんなに面倒事なんてないんだけどな。だから、作者も書くのが大変になったんだがな。実際作者もこんなタイトルにしなきゃよかったと思っていろいろいだしな。」

「だからって、やめるということはないと思うんだが。タイトルを途中で変えるとかすればいいじゃないか。何でそんなことをしないんだ？」

「作者も一度そう考えたが、もしそうなってしまうと、今までの内容も考えると終わらせることにしたんだ。まあ、安心しろ。だからと言って、書くのをやめるわけではない。ただ、少しの間別れるけどな。」

「なんか打ち切りフラグっぽく聞こえるんだが。」

「気のせいだ。さて、ここまで読んできた者には大変申し訳ないが、この小説は今回の話で最後とする。釈然としない者もいるかもしれないが、どうか愚かな作者を許してやってくれないか。別に作者も悪気があったわけではない。ただ、少し間抜けだったんだ。だが、悲しむ必要はない。先ほども言ったが、近いうちにまた新しいのを投稿する。当然俺らもそこに出てくる。だから、そこでまた会おう。最後にこんな最後になってしまったが、ここまで読んできた者には感謝している。ただ、できれば感想がほしいなと思ったりもしたかな。」

「えーと、特に言うことはないが。まあ、こんなことになってしまつて少し残念でならない。ただ、さっき竜輝が言つたとおり、あまり作者を責めないでくれると俺としてはうれしいかな。以上だ。」

「では、最後の言葉として一言言おう。」

よろしくな。」

今までありがとう。これからも

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5391x/>

なんでも屋の日常～面倒事編～

2011年11月16日11時09分発行